

縄文から 今を想う



今年の秋、霧島田口にある「真田原遺跡」から多くの土器・石器などが発見されました。

真田原遺跡は、霧島連山を一望できるとても景色の良い場所にあり、日本最古の水田といわれる「狭名田の長田」の近くにありま

す。約六四〇〇年前（縄文時代）に、屋久島と開聞岳の間にある鬼界カルデラが大爆発しました。この火山灰はオレンジ色をしていて、掘ってみるととても厚い層になっています。この層の下には、硬くて青く、厚さは二〇センチほどの火山灰（霧島の火山灰）の層が出てきます。そのすぐ下から、黒曜石で作られた矢じりや、塞ノ神式土器といった縄文時代早期後葉の土器が見つかりました。これにより、この遺跡の辺りには、約七五〇〇年前に人が住んでいたことが分かりました。今回調査した所からは、住居跡のようなものは発見されませんが、たくさんさんの遺物が出土した地点から北の地点に行くと、地表面から約六メートル下、薩摩火山灰層という、約一万一五〇〇年

前に桜島が爆発したときに噴出した火山灰の層辺りから、「落とし穴」が見つかりました。ちょうど谷になっているところで、そこに穴を掘り、ケモノを追いかけて捕まえていたのでしょうか。

さて、先に黒曜石で作られた矢じりが出てきたと紹介しましたが、黒曜石というのは旧石器時代から全国的に利用された石器の代表的な素材です。黒曜石のかわたまりを割ると、ガラスを割ったように鋭くなり、肉なども簡単に切ってしまう、とても役に立つ石なのです。しかしながら、黒曜石はそう簡単に手に入るものはありません。限られた所でしかとれないのです。しかも、見つかった黒曜石の中には、大分県の姫島という所でとれる灰色の黒曜石も見つかっています。なぜ大分県の石が霧島で発見されるのでしょうか。縄文時代の人々がどのような生活をおくっていたのか想像してみてください。

今、出土した土器のかけらを少しずつつなげていきます。つなげていくと、とても大きな土器が二つできていきます。ただはつきりとは分かりませんが、直径四〇センチ以上はあるのではないかと思われま

す。他にも、火を利用して調理したと考えられる「焼け石」、周囲の畑からは、木の実などをすりつぶしたのではないかと思われる「すり石」や「石皿」も見つか

っています。もしかしたら、とても大きな遺跡かもしれません。霧島市内には縄文時代の遺跡がたくさん存在します。誰もが知っている国分の上野原遺跡がその代表です。十三塚原や春山原、真田原遺跡の近くにある牧園町の界子伝でも遺跡が見つかっています。市内の台地上にはたくさん縄文時代の遺跡があり、そこではさまざまな生活が営まれていたのです。

このように、縄文時代の人々と我々は、とても身近なものなのです。このような発見を通して、故郷・霧島市を見直してみるのとはとても良いことではないでしょうか。

文責 坂



遺物出土状況